

随 筆

街道を歩く(2) 鎌倉街道 岡崎～新居

佐々木 教祐

1. 真宮遺跡～矢作東宿

矢作川の東岸にある真宮遺跡は縄文時代晩期から鎌倉時代にかけての複合遺跡で、住居跡や甕棺が多く残されており国の史跡に指定されている。この時代の道は小高い丘を繋ぐように通っているのが特徴である。ここから東の台地を探すと名鉄東岡崎駅のうしろ国立共同研究機構、岡崎高校がある丘が見える。ここには、徳川家ゆかりの龍海院、田村磨將軍が東夷征伐のため下向なさる折にご祈願、天皇に奏聞、勅許のうえ再建され「六所大明神」の勅額を下賜された六所神社があり、その隣にある安心院は義経が浄瑠璃姫追善のため伽藍を建て妙大寺と号したが、数度の火災で無くなってしまい、明大寺という地名のみが残ったと岡崎市史にある。この辺りが矢作東宿と思われる。

2. 矢作東宿～山中八幡宮

六所神社から丘を登り岡崎高校と三島小学校の間の道を通り、丘を下って名鉄名古屋本線を越えて、生田城跡を右に見て1号線を越えて法泉寺の傍を通り、船山神社から山綱川の北の丘の裾野を通って藤川に至る。江戸時代以降の藤川の宿は1号線の南にあるが、江戸時代の東海道（以下旧東海道と略す）が整備される時、1号線の北にあった山裾の村を移住させて藤川宿を作ったとの記録がある。1号線の北沿いにある村から名鉄の線路を越えて山中八幡宮に向かう。当地に山中光重という人があり、朱鳥14年（699）9月9日、宇佐八幡大神の夢のお告げで神霊を迎え、当地に社を建てたのが始まりとされる。敷地内に「鳩ヶ窟」（はとがくつ）と呼ばれる小さな洞窟があり、永禄6年（1563）に起こった三河一向一揆の戦いで、徳川家康が敗れて逃げ隠れた洞窟と云われる。追手の兵がこの中を探そうとしたが、洞窟から白い鳩が2羽飛び立ったので、追手の兵は「人のいる所に鳩などいるわけない」といって通り過ぎ、家康は難をまぬがれたといわれる。その後、この洞窟を鳩ヶ窟と呼び、これにより八幡宮の山を御身隠山（おみかくしのやま）と呼ぶようになった。山綱川が流れるこの付近が奈良時代の山豆奈（山綱）駅家のあった場所と推定されている。

3. 山中八幡宮～本宿

この神社から山中町を通り鎌倉街道の遺構と呼ばれる山の裾野を通って傳道寺裏の細い道を抜けると青木神社の正面に出る。「天神越え」と呼ばれる山中と本宿を繋ぐ鎌倉街道の遺構の入口は青木社本殿の左横にあるが、現在はほとんど使われていない。「天神越え」の本宿側の出口は村のお墓の端で、目の前は市立東海中学のグラウンドがある。道沿いに行くと学校の正門に出る。街道は直進しグラウンドを横断していたと思われる。本宿の町を通る旧東海道から山を少し登ったところに古刹の法蔵寺がある。寺伝によれば大宝元年（701）行基によって法相宗の二村山出生寺として創建された。至徳2年（1385）教空龍芸により浄土宗の法蔵寺に改められた。嘉吉元年（1441）松平親氏により伽藍建立。天文16年（1547）徳川家康が伯父である住職の教翁に師事。永禄3年（1560）家康により守護不入の特権が与えられた。寛永19年（1642）徳川家光より朱印地82石を授かる。文政9年（1826）シーボルトが参拝。明治元年 住職の孫空義天が近藤勇の首を祀る。鎌倉街道は寺の裏を通ったと寺の案内板の説明にあった。

4. 本宿～三河国府（国府）

本宿から山裾を1号線沿いに進むと赤石（あかいわ）神社があり、旧東海道はまっすぐ赤坂宿に進むが、鎌倉街道はここから赤坂宿に至る地域が湿地帯だったため、ここを避けて宮路山（361m）の登山道を進み頂上近くを通り赤坂宿に至る道を通っていた。赤石神社は延暦年間（782～805）信濃国の諏訪大明神の分霊を勧請し、赤石の地に奉斎したのが始まりという。昔、ここ長沢の西の外れにあった沼には大うなぎの化け物が住みつき、地域の人を悩ませていた。この地に立ち寄った坂上田村麻呂がその化け物を退治したが、その後、沼の水を汲んだ者が次々と病にかかってしまい、人々は祟りだと恐れ、祠を建てその霊を慰めたのが今の赤石神社だと云う。ここから宮路山への登山道には聖徳太子が馬でこの辺りを通りかかったとき、折からの暑さで喉が渇き水を望まれた。家来が見つけた枡のような井戸の湧き水を口にした太子は、その清く冷たい水に感動して、太子自ら「小渡井枡井戸」と名づけられたと云う。宮路山の山頂には大宝2年（702）持統上皇が三河に巡行された「宮路山聖跡」の碑が建っている。また、壬申の乱（672）の時、持統上皇の子、草壁皇子が宮路山山頂近くで守備にあたり、皇子は宮道天神社の祭神となっている。宮路山山頂近くには宮道天神社奥宮があり、山を下ると7世紀末創建と伝わる宮道天神社がある。もう少し下って赤坂の町の入口にある長福寺は、三河の国司大江定基（962？

～1034) が病没した赤坂の長者の娘力寿姫の菩提を弔うために建てた寺で、慶長検地の際に除地の扱いを受けるなどその寺格は高い。力寿姫は赤坂の長者・宮路弥太郎長富の娘で、美しく歌舞伎に優れていた。三河国司を務めた大江定基に愛されたが、ほどなく病により亡くなる。大江定基は力寿姫の菩提を弔うために長福寺を建て、裏手の高台の見晴らしの良い所に墓を、そして、力寿山舌根寺に「文殊楼」を建てた。この文殊楼が今の財賀寺にある文殊堂で、毎年3月には文殊祭りが行われると云う。江戸時代になってからは、力寿姫と大江定基のロマンスを伝えようと、賤賀町に力寿の碑を建て、そこに桜の木を植え「力寿の桜」と名付けて今でも春には美しい花を咲かせる。また、大江定基が亡き力寿姫の菩提を弔うため、愛染池畔に祀ったと伝えられている愛染明王尊像は西明寺にあり、愛妾力寿をモデルに自から彫刻して、本尊の弁財天としてお祀りしたのが豊川駅の近くにある三明寺だという。赤坂宿から御油を通り名鉄の線路を越えて大江定基ゆかりの西明寺に至る。大江定基は、帰京のあと988年比叡山で出家、寂照として天台教学、密教を学んだあと宋へ渡り、日本に帰らぬまま杭州で亡くなった。大江定基の伝説は岡崎から豊川の広い範囲に残っている。門前の道をまっすぐに下ると東三河最大の前方後円墳といわれる船山古墳の前に出る。この一帯が三河国府跡のある国府町で、すぐ近くに名鉄の国府(こう)駅がある。

5. 三河国府～豊川

名鉄国府駅前の線路沿いの細い道を豊川方面に300mほど進み左折して少し行くと三河総社がある。三河総社とは、都から赴任した国司は、「三河国内神名帳」に記載されてる神社を毎月巡拝し幣帛(へいはく:神に奉獻する供物)を奉ることが恒例となっていたが、平安時代の嵯峨天皇の御世、三河国内神名帳の五十九社の神霊をこの社に祭り、国司巡拝の代わりとした。三河国庁はこの総社の東側にあった。重要な史跡が姫街道を越えて八幡宮から国分寺跡、復元整備された国分尼寺史跡公園と続いている。山麓の道を進むと伊知多(いちだ)神社が高台にある。この辺りから一面の野原であった本地ヶ原(穂の原)を通り抜け豊川稲荷あたりを抜けて三明寺付近にあった豊川の船着き場に達する。この辺りは三河の国に併合される前は穂の国と呼ばれていたという。

6. 豊川～新居

豊川は当時は飽海川と呼ばれる大河であった。この三明寺付近の渡し場の他にも、旧東海道の近くにある「志香須賀(しかすが)の渡し」が有名である。

平安時代の頃、豊川河口付近の川幅は今よりも広く4km程もあり、往来する人々は船でこの川を渡った。この渡しを「志香須賀の渡し」と云い、右岸の船着き場が「柏木濱（かしわざのはま）」で、対岸は豊橋市牟呂町坂津であったと伝えられる。豊川の川筋が変わるたびに渡しの場所も変わったようである。現在も運航している豊川の兩岸を結ぶ竿による渡し船は、昭和7年から豊橋市営となった「牛川の渡し」があり、休日には遠くから楽しみに乗りに来る人がいるとの船頭さんの話である。今回は頼朝の時代の街道を歩くことにして、馬場熊野神社から姫街道沿いに進み「当古の渡し」を通って、田圃より数メートル高い段丘の上にある浪ノ上（なみのうえ）稲荷社付近の東岸の船着き場から上陸する。稲荷社内には古墳も残っている。次の目標は小高い丘の上にある忠興八幡社で、創建は不詳だが、忠興新切検地帳には貞享3年（1686）10月とある。忠興の地名の由来となる、細川幽斎ゆかりの厄除け一宝観音を守護佛としてお祀している。八幡社を下り東陵中学校の前を通り、牛川原人史跡公園の傍を抜け、鎌倉街道遺構の案内板がある細い山道を進むと赤岩山の裾を回って赤岩寺の前に出る。ここから1190年源頼朝が京都へ行く途中に鞍を奉納して武運を祈願した鞍掛神社にお参りして、普門寺・神石山自然歩道入口から荒れた山道をたどり船形山を越えて普門寺に向かう。普門寺は727年行基が建立したとされる名刹で、源頼朝の上洛の途中でこの寺に宿泊したとされる。ここから旧東海道沿いに白須賀を通って新居の加宿（橋本）に至る。この松並木の中に為家・阿仏尼の歌碑が立っている。さらに行くとも頼朝が寵愛した長者の娘のちに出家して建てたと伝わる紅葉寺跡が石段を上った所に残り、橋本には「風炉の井」と呼ばれる源頼朝が上洛の折、この井戸水を茶の湯に用いた井戸が残る。鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」には建久元年（1190）10月3日、頼朝は1000人に及ぶ関東武士の大行列を従え、京都に向かって鎌倉を出発した。11月7日の入洛まで33日もの日数を費やしている。18日には橋本宿に陣容を整えるために、5、6日の滞留をしているが、その際大勢の遊女が訪れ、頼朝はじめ将兵らに贈り物をささげたと書かれているのみだが、「風炉の井」、長者の娘「妙相」、上洛行列の後尾の警護総隊長の梶原平三景時の子源太景季が物見をしたという「源太物見の松」が言い伝えとして残る。

7. 浜名の橋

清少納言（966-1025頃）の書いた枕草子にも載っている「浜名の橋」は、歌枕（和歌に多く詠み込まれる名所・旧跡）にも読まれた有名な景勝地であり、浜名湖から流れ出る川にかかっていた。平安初期の歴史書『三代実録』による

と、貞観4年(862)に修造され、その後、20年を経て壊れたので、元慶8年(884)に勅(天皇の命令)が発せられ、改修工事には遠江国の正税1万2640束の稲が当てられた。橋は、長さ56丈(166.88m)・幅1丈3尺(3.87m)・高さ1丈6尺(4.77m)であり、当時としては大きなものであった。長く淡水湖であった浜名湖も室町時代明応7年(1498)8月に大地震(明応の大地震)が起こり、浜名湖は外海よりも水位が高い湖であったために津波は湖に浸水することはなかった。ところが浜名湖の水面が地震により1メートル以上沈下した結果、湖と外海の水面が直接つながった。翌明応8年6月には暴風雨に見舞われ外海からの高波、高潮が湖内に侵入した。この高波で前年の地震で地盤沈下した海岸の各集落は高潮の大被害を受けた。また、天白原台地の高師山連峰の斜面が大雨によって山津波を引き起こし、この土砂崩れにより浜名川の河口が埋められてしまい、浜名川の水は出口を失った。排水口を失った水流は強大な激流となって砂堤が低く、地盤の弱いところを破って外海へ流出し今切が出現したようだ。橋本は、平安時代以降交通の要地として繁栄してきたが、浜名川の決壊によって今切が出現すると、盛んになってゆく今切の渡船業務により、交通の要地としての重要性は、隣村新居湊へ移って行った。そして、橋本村は慶長6年に宿場となった新居宿に隣接する村落としての補佐役になった。

参考資料として、新編岡崎市史、碧海郡誌、豊橋市史、新編豊川市史、音羽町史、湖西市史、新居町史などを使わせていただきました。

紀行文に残る道の記録(地名)

- ・明日香井和歌集(1221年以前) 八橋一矢作宿一宮地山一火打坂一高師山一白須賀
- ・海道記(1223年) 萱津一矢橋(矢作)一豊河(豊川)一橋下(橋本)一池田一
- ・東関紀行(1242年) 柏原一杭瀬川一熱田の宮一八橋一矢作宿一赤坂宿一本野川原一豊川一橋本一
- ・宗尊親王下向記(1252年) 境川一矢作一宮地中山一豊川一大岩
- ・十六夜日記(1279年) 一宮の杜一熱田の宮一二村山一八橋一宮地の山一渡津一高師の山一浜名の橋一引馬一
- ・覽富士記(1432年) 八橋一矢作一山中一八幡一今橋一大岩
- ・実堯記(1563年) 八橋一矢波木一作岡一山中一赤坂一渡津一今橋

(名古屋大学名誉教授)



私の歩いた鎌倉街道 岡崎～新居